

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第148集

有
池
遺
跡
Ⅱ

交野市

有 池 遺 跡 Ⅱ

主要地方道枚方大和郡山線（都市計画道路村野神宮寺線）道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇六年十一月

財団法人 大阪府文化財センター

2006年11月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第148集

交野市

有池遺跡Ⅱ

主要地方道枚方大和郡山線（都市計画道路村野神宮寺線）道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

第二京阪道路の建設は、それに取り付く多くの府道の建設が伴います。本書は、第二京阪道路と交わるそういった大阪府都市計画道路に係る有池遺跡の発掘調査成果の報告です。幅80メートルを越える路線幅を持つ第二京阪道路とそれに取りつく府道にまたがる広範な調査は、その範囲にある遺跡群を次々と明らかにして参りました。

有池遺跡の北に接する倉治遺跡、東倉治遺跡は弥生時代、古墳時代、古代の集落遺跡としての、南にある上私部遺跡も古墳時代、古代の集落遺跡としての実態が明らかになってきています。本書で報告する有池遺跡も、古墳時代、古代の集落遺跡であり、上記の遺跡と関連するもので、各々の時代にわたって密接な繋がりと広がりを持っていることが判りました。このような形で姿を表現した当該地域の脈々とした歴史の流れの延長上に現在の交野があると言えます。

今回の有池遺跡の調査では、古代の集落の一部と、生産遺跡である水田跡を発見しています。その水田跡に残された幾条もの溝の方向で、水田跡の時代が異なることも把握できました。河道が付け替えられたことや、河道に近い湿地帯の開発は容易でなかったこと、近世に至ってようやく河道近くまで開発が進んだことも明らかになっています。また、居住地と生産地の境界付近で、地鎮めや豊穡を祈る祭祀を執り行ったとみられる遺構も発見されています。

このように第二京阪道路建設は、この有池遺跡も含め、路線内に埋もれていた多くの歴史を現代によみがえらせることになりました。ここで得られた成果は、市民、府民の皆様をはじめ、さらに広く、国民共有の文化財として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、国土交通省、大阪府枚方土木事務所、交野市をはじめ、関係諸機関、諸団体、地元各位の方々に様々なご支援・ご協力をいただきましたことに心から御礼を申し上げます。

2006年11月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は大阪府交野市青山に所在する有池遺跡04-1の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大阪府枚方土木事務所から主要地方道枚方大和郡山線（都市計画道路村野神宮寺線）道路整備事業に係る有池遺跡発掘調査として委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人大阪府文化財センターが実施した。事業契約期間は平成16年11月1日から平成17年2月28日までであった。
3. 現地調査と報告書作成は当センター京阪調査事務所交野分室が担当した。平成16年度に現地調査を行い、整理作業並びに本書の作成は平成18年度に終了した。
現地調査は調査部長 玉井 功、調整課長 赤木克視、京阪調査事務所長 渡邊昌宏、調査第五係長 秋山浩三の指示のもと、調査第五係主任技師 合田幸美、専門調査員 遠藤啓輔、専門調査員 木村寛之が実施した。整理作業は調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰、調査第三係長 小林義孝、主査 森井貞雄の指示のもと調査関係者が順次行った。
4. 調査における全景及び遺構の写真撮影は調査担当者が行い、遺物の撮影・焼付けは、京阪調査事務所主査 上野貞子が行った。
5. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々の参加・協力・助言を得た。記して感謝の意を表する。（順不同）
奥野和夫、真鍋成史、小川暢子（以上、交野市教育委員会・財団法人交野市文化財事業団）
久木真美、松本直美、山田久美、田中正子（以上、当センター非常勤職員）
山田浩史、丸吉繁一、岡本智子（以上、当センター専門調査員）
6. 本書の編集は平田と遠藤が行い、第1章、第2章と第3章第3節を平田が、第3章第1節、第3章第2節と第4章を遠藤が執筆した。
7. 本調査で出土した遺物及び調査に係る写真・実測図などの記録類は財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図等の基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を用い、単位はメートルで表記した。
2. 発掘調査及び本書で使用した座標は、世界測地系（測地成果2000）に則る平面直角座標第Ⅵ座標系に準拠し、単位はメートルで表記している。地形図、遺構実測図に付した方位はすべて座標北を示している。
3. 本書の作成は財団法人大阪府文化財センターの定めた「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」（2003年8月）に基づいている。地区割りの第Ⅰ区画はJ7、第Ⅱ区画は10で、第Ⅲ区画は1Fに取まる。
4. 土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を参考にした。
5. 遺構番号は調査区、遺構の種類に関係なく、本調査で通しの番号を付した。遺構図は適宜縮尺を変えて掲載し、各図にスケールと縮尺率を明示している。遺物図は4分の1の縮尺で掲載し、スケールを明示した。
6. 挿図中の遺物番号、出土遺物一覧表番号、図版の遺物番号はそれぞれ対応している。
7. 本文中の遺構の単位は基本的にメートルで、遺物の単位はセンチメートルで記述し、末尾に単位（m、cm）を明記した。
8. 本書の記述にあたって、執筆担当者間で文章表現、用語の統一は特に図ってはいない。

目 次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯と調査方法	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査成果	
第1節 基本層序	5
第2節 遺構	6
第3節 遺物	13
第4章 まとめ	18

挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 地区割り図	2
図3 調査遺跡と周辺の遺跡	3
図4 基本層序柱状図	5
図5 調査区平面実測図	6
図6 1 調査区溝断面実測図	8
図7 2 調査区86土器溜り平面実測図	10
図8 2 調査区113柱列実測図	11
図9 2 調査区98ビット・105ビット実測図	12
図10 出土遺物実測図1	13
図11 出土遺物実測図2	14
図12 出土遺物実測図3	15
図13 出土遺物実測図4	16
図14 出土遺物実測図5	17

表 目 次

表1 出土遺物一覧表	19
------------	----

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 垂直写真 (上が北方向)
- 図版 2 遺跡 1. 全景 (南から)
2. 1 調査区北半全景 (南東から)
- 図版 3 遺跡 1. 1 調査区南半全景 (東から)
2. 1 調査区 7 溝 (南西から)
3. 1 調査区 7 溝断面 (南西から)
4. 1 調査区 2 溝 (西から)
5. 1 調査区土器出土状況 (南から)
- 図版 4 遺跡 1. 2 調査区 86 土器溜り 検出状況 (北から)
2. 2 調査区 98 ビット 上層石 検出状況 (北から)
3. 2 調査区 98 ビット 土器 検出状況 (北から)
4. 2 調査区 98 ビット 下層石 検出状況 (北から)
5. 2 調査区 69 ビット 石 検出状況 (南から)
6. 2 調査区 69 ビット 断面 (南から)
7. 2 調査区 105 ビット 石 検出状況 (北から)
8. 2 調査区 105 ビット 完掘状況 (北から)
- 図版 5 遺跡 1. 1 調査区 北部西側断面 (基本層序柱状図②)
2. 1 調査区 南部西側断面 (基本層序柱状図④)
3. 2 調査区 南西側断面 (基本層序柱状図⑤)
- 図版 6 遺物 1 調査区 2 層上層 (7) ・ 2 層下層 (11・14) ・ 2 面直上 (17) ・ 2 溝 (22)
36 溝 (23・24) ・ 6 溝 (28)
- 図版 7 遺物 2 調査区 98 ビット (33・34) ・ 105 ビット (38)
86 土器溜り (42~44・46・47・52~54)
- 図版 8 遺物 1. 1 調査区 2 層上層 (1~6) ・ 2 層下層 (8~10・12・13)
2. 1 調査区 3 層 (15・16) ・ 9 ビット (18) ・ 62 溝 (19) ・ 2 溝 (20・21)
20 溝 (25・26) ・ 21 溝 (27) ・ 6 溝 (29・30)
- 図版 9 遺物 1. 2 調査区 111 ビット (31) ・ 98 ビット (32) ・ 68 ビット (35・36)
89 ビット (37) ・ 112 ビット (39・40) ・ 69 ビット (41)
86 土器溜り (45・48~51)
2. 1 調査区 1 層 (55) ・ 2 層 (56) ・ 22 溝 (57) ・ 6 溝 (58)
2 調査区 (59)

第1章 調査の経緯と調査方法

有池遺跡04-1の発掘調査は、主要地方道枚方大和郡山線（都市計画道路村野神宮寺線）の建設に伴い、大阪府枚方土木事務所の委託を受けて（財）大阪府文化財センター京阪調査事務所交野分室調査第五係が実施した。有池遺跡は平成11年度に試掘確認調査が実施され、古墳時代と中世の遺構・遺物が確認・検出されている。この結果を受けて平成14～15年度にかけて第二京阪道路建設に伴う有池遺跡02-1・有池遺跡03-1・有池遺跡03-2の発掘調査が実施され、本調査も有池遺跡04-1として実施したものである。調査は平成16年11月19日に開始し、翌平成17年1月31日までの期間で実施した。

調査地区の南端を東西に里道と水路が走り、この保全のため、1調査区と2調査区に分けて調査を実施した。調査では、現代から近世の耕作土層を機械掘削で除去し、以下から地山とみられる最終遺構面まで人力による掘削を実施し、遺構と遺物の確認を行った。

遺構と検出面の測量・実測は世界測地系に基づいた平面直角座標系（平成14年度国土交通省告示第9号）を基に実施した。測量はヘリコプターによる航空写真測量に拠り、図化は50分の1の縮尺で行った。個別の遺構・遺物の平面実測・断面実測は100分の1、50分の1、20分の1、10分の1などの図化目的に応じた縮尺を設定して実施した。遺物は基本的に10m間隔で区分した方形区画毎に、地点、層位、遺構、日付を明示して取り上げ、登録番号を付した。

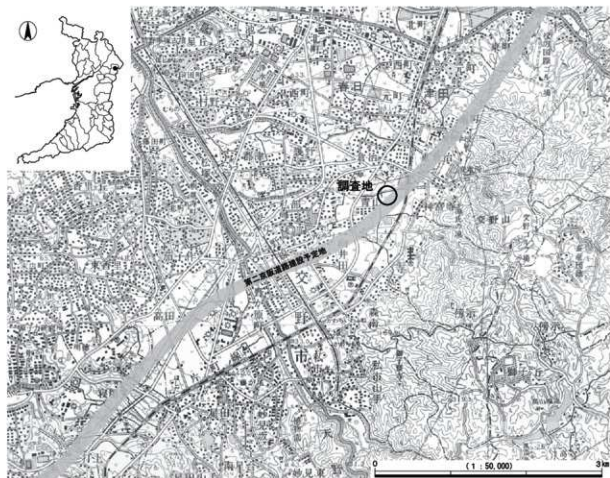


図1 調査地位置図（1：50,000）

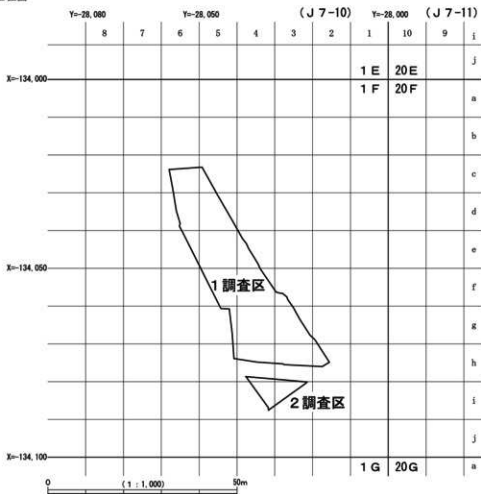
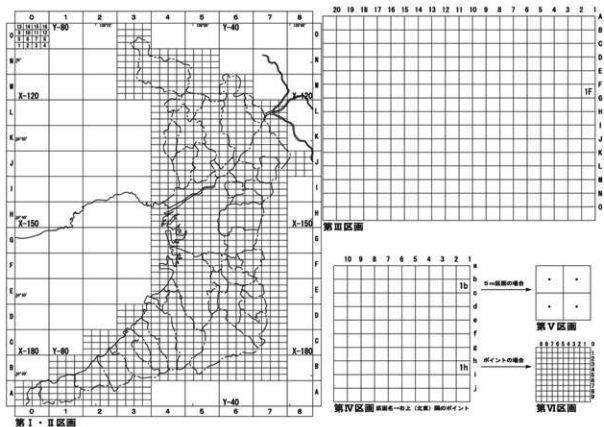


図2 地区割り図 (1:1,000)

第2章 位置と環境

有池遺跡は交野市青山に所在し、倉治集落の南東に位置する。JR学研都市線と府道交野久御山線に東西を挟まれ、遺跡北部を免除川が、南方を私部北川が西流する。警船断層沿いに流下する天野川の右



図3 調査遺跡と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

岸では、生駒山地は交野断層に沿い、向きを北北東にとる。山地は標高300～350m前後の峯を形成し、南から竜王山、旗振山、交野山として連なっている。有池遺跡はこの交野山の西北山麓の中位段丘面に立地している。

交野山の西北山麓では、旧石器時代の人々の活動痕跡が見出される。免除川上流域の高位段丘面にある神宮寺遺跡では、横剥ぎタイプのナイフ形石器、掘斧が出土しており、2万年から2万5千年前のものとされている。

この神宮寺遺跡では縄文時代早期の押型文土器も出土し、数基の炉跡とみられる遺構が確認されている。この地域での早期とみられる遺物は南山遺跡からも出土しており、雁又式の石鎌と剥片が確認されている。有池遺跡の西隣の焼垣内遺跡では、縄文時代晩期の滋賀里式土器の出土が報告されている。

弥生時代の遺跡は、天野川に近い低地や免除川の下流域で確認されている。前期から後期の遺跡は私部南遺跡、中期から後期の遺跡では森遺跡、天田神社遺跡、私部城遺跡がある。また、後期の特殊な遺跡として標高215mの山上にある南山遺跡が知られている。

古墳時代前期の遺跡は森古墳群、鍋塚古墳、妙見山古墳が挙げられる。この時期の集落遺跡としては森遺跡、天田神社遺跡、東倉治遺跡がある。中期には平地に近い丘陵上に大畑古墳や車塚古墳群が成立し、上私部遺跡、森遺跡、郡津洪り遺跡、交野郡衙跡、倉治遺跡、焼垣内遺跡などの集落遺跡が平地に展開している。後期では山麓際や台地に横穴式石室をもつ清水谷古墳、倉治古墳群、山腹に造営された寺古墳群が姿を現し、集落遺跡では森遺跡、上私部遺跡などが確認される。また、須恵器を焼いた大谷窯跡、大谷北窯跡なども発見されている。

この交野山の西北麓一帯は、弥生時代以来の交通の要衝で、古墳時代にもその重要性は失われることはなかった。古代に至っては、郡津に交野郡衙も設置されており、淀川河口から枚方を経由、天野川の水運を利用して郡津に廻り、かいかけ道や警船道を越えて、大和中枢部と連絡する拠点的な位置を占めていたとみることができよう。

《参考文献》

交野町教育委員会	昭和43年（1968）	「妙見山古墳調査報告書」
交野市古文化研究会	昭和50年（1975）	「倉治古墳群発掘調査概要」－交野市大字倉治小字東浦所在－
大阪府教育委員会	昭和52年（1977）	「大阪府文化財分布図」
大阪府	昭和58年（1983）	「大阪府史」第1巻 古代編1
交野市	昭和61年（1986）	「交野市史」自然編1
交野市教育委員会	昭和62年（1987）	「清水谷古墳調査概要」
大阪府教育委員会	昭和63年（1988）	「高野街道」歴史の道調査報告書 第二集
交野市	平成4年（1992）	「交野市史」考古編
交野市教育委員会	平成12年（2000）	「交野東車塚古墳」〔調査編〕
(財)大阪府文化財センター	平成13年（2001）	「長尾台地区、杉・水室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群」(財)大阪府文化財センター調査報告書第61集
交野市	平成14年（2002）	「交野市文化財分布地図」(平成14年3月改定版)
交野市教育委員会	平成15年（2003）	「鍋塚古墳2000-1次調査・有池遺跡2002-1次調査」

第3章 調査成果

第1節 基本層序

当調査地は南東から北西に向かって緩やかに地盤が下がる斜面上に立地しており、現地表面は調査地北端と南端との間で約0.5mの高低差がある。現代耕作土層下に遺物包含層が3層あり、上から順に1層、2層、3層とした。1層は明黄褐色粗砂や暗灰黄色細砂を主体とする。キセル火口(図14-55)、くらわんか茶碗、染付などの近世の遺物が混じる。2層は灰色シルトやにぶい黄色粘土を主体とする。安土桃山時代の陶器皿(唐津焼、図10-7)が混じる。1調査区南部および2調査区では、2層完掘後が最終遺構面である。3層は1調査区北部でみられ、オリブ黒色粘土を主体とする。鎌倉時代の瓦器碗、瓦質土器三足釜が混じる。1調査区北部では3層完掘後が最終遺構面である。遺構検出は最終遺構面で行った。最終遺構面の高さは調査地北端と南端との間で約1.4mの差がある。地山はオリブ灰色粗砂が主体である。1調査区東南部の地山は灰オリブ色粘土であり、湧水がみられる。

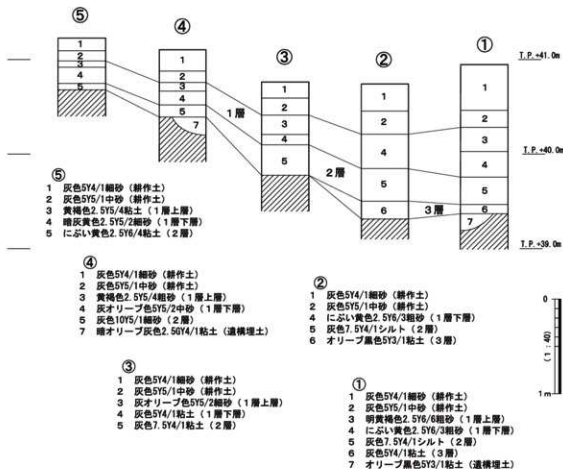


図4 基本層序柱状図 (1:40)

第2節 遺構

1 調査区は、中央をのびる7溝の北側と南側で様相が異なる。調査区北半では、自然流路が検出され、北端は網状の流路になっている。自然流路の他には、風倒木痕を数基検出したが、遺物は出土していない。

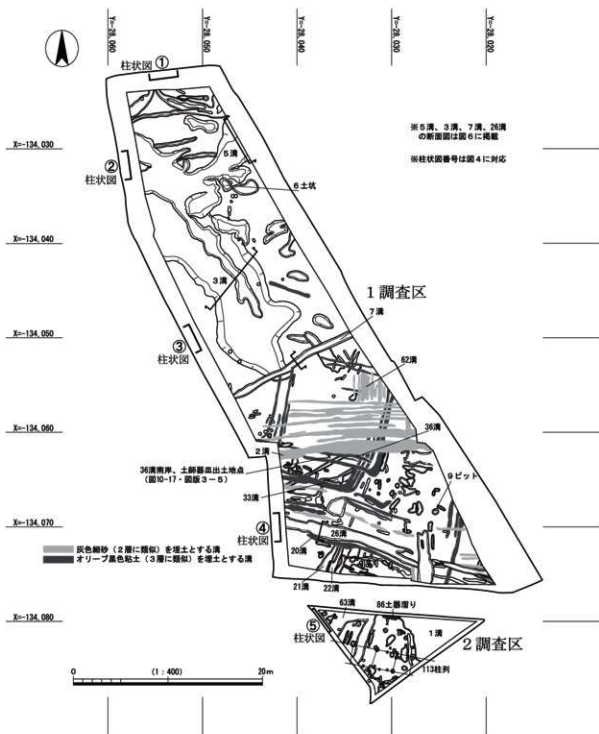


図5 調査区平面実測図 (1 : 400)

溝群は、5溝(図5・6)の出土遺物から平安時代後期～鎌倉時代前期にかけて埋没したものとみられる。

調査区南半では、耕作に伴う溝群を検出した。2溝(図5、図版3-4)などのほぼ正方位を指向する溝が、36溝(図5)などの正方位でない溝を切っている。また、正方位を指向する溝の埋土は灰オリープ色シルトが混入する灰色細砂などの2層に類似した土層であるのに対し、正方位でない溝の埋土はオリープ黒色粘土などの3層に類似した土層である。これらのことから、溝の方向が時期差を反映しているものと考えられる。正方位でない溝は、36溝・20溝(図5)の出土遺物から、平安時代後期～鎌倉時代前期にかけての時期に埋没したとみられる。一方、正方位を指向する溝は、2溝の出土遺物から、室町時代以降に埋没したものとみられる。

2調査区では、西側にピット群が展開する。ピットには掘立柱建物の柱穴と考えられるものが多数あり、そのうちの一部を113柱列(図8)に復元した。柱根の遺存したものはなく、廃絶時に柱材が抜き取られた可能性が高い。柱穴には礎板として使用されたとみられる扁平な石を伴うものもある。104石(図8)は、礎板か根固めとして使用された石が遺棄されたものの可能性がある。113柱列の年代は、68ピット(図8)の出土遺物から、平安時代後期と考えられる。また、113柱列の北には、平安時代後期の土器を埋納した86土器溜り(図7)と98ピット(図9)が検出された。

以下で主な遺構について記述する。

1 調査区

5溝(図5・6) 調査区北部に位置する。大きく蛇行しながらほぼ東西方向に流れ、調査区外に延びる。検出長約11.0m、検出幅約4.9mである。横断面は基本的に深さ約0.4mの逆台形を呈し、部分的に中島状の高まりや土坑状の凹みがみられる。埋土は3層に分かれ、上層は暗灰黄色シルトがブロック状に入る灰色細砂混シルト、中層は明オリープ灰色細砂混シルトがブロック状に入る灰色細砂混シルト、下層は明オリープ灰色細砂混シルトである。土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜、器種不明の陶器(備前焼)が出土した。土師器皿の年代が12世紀後半～13世紀前半とみられることから、平安時代後期～鎌倉時代前期以降に埋没したと考えられる。

6土坑(図5) 調査区北部に位置し、5溝の南岸に接する。検出長約1.5m、検出幅約0.8mである。断面は深さ約0.3mのU字形を呈する。埋土は0.5cm大の礫である。土師器皿(図11-28)、瓦器椀(図11-29)、瓦質土器三足釜、瓦類、陶器鉢(図11-30)が出土した。土師器皿、瓦器椀の年代から室町時代の遺構と考えられる。

3溝(図5・6) 調査区北半部に位置する。南南東から北北西に向けて流れ、5溝に合流する。検出長約24.0mである。幅約6.0m、深さ約0.04～0.1mの浅い凹みの中央が幅1.1m、深さ約0.3mの断面U字形に落ち込む。埋土は3層に分かれる。上層はオリープ黒色細砂である。中層はオリープ黒色粘土～シルトであり、この層の下部には暗灰黄色細砂混シルトやオリープ黒色細砂混シルトがブロック状に入る。下層である東肩部の堆積層はオリープ黒色細砂混シルトがブロック状に入る灰オリープ色細砂混シルトである。

遺物は出土しなかった。溝の南端が7溝に切られることから、浅い凹み状の地形は古墳時代以前に形成されていた可能性がある。

7溝(図5・6、図版3-2・3-3) 調査区中央に位置する。真西より約25度南に振れた方向にほぼ直線的に流れ、調査区外に延びる。検出長約14.0m、検出幅約0.65mである。断面は深さ約0.15mの

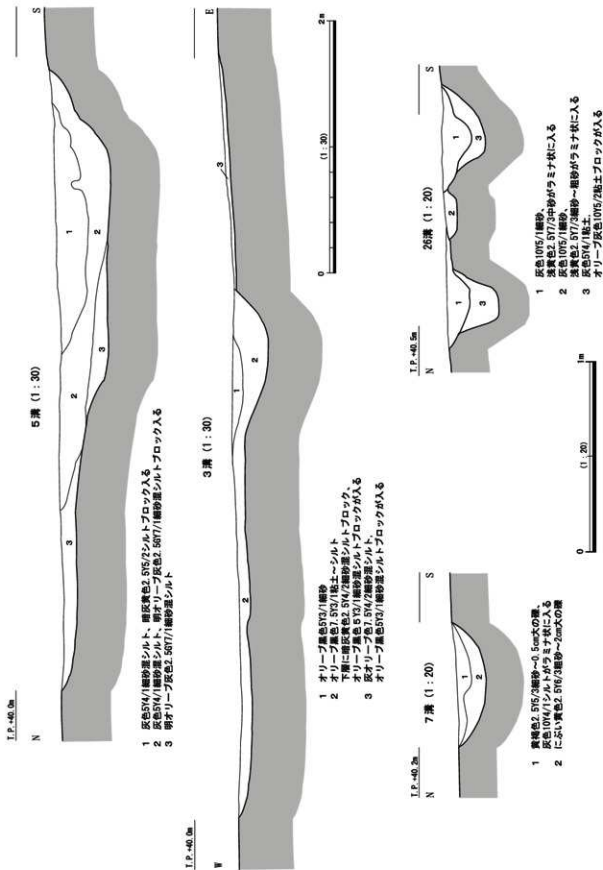


図6 1調査区横断面実測図 (1:20/1:30)

浅いU字形を呈する。埋土上層は灰色シルトがラミナ状に入る黄褐色細砂～0.5cm大の礫、下層がにぶい黄色粗砂～2cm大の礫である。遺物は出土しなかった。

なお、当溝は東側に隣接する有池遺跡03-1の6調査区2溝、さらにその東側に隣接する有池遺跡03-1の4調査区242溝と連続する溝とみられる。これらはほぼ直線的に伸び、総延長は約140mにおよぶ。埋土はいずれの調査区においても当調査区7溝と同様に細砂～礫であり、溝の埋没が洪水と関係する可能性が考えられる。有池遺跡03-1の6調査区東側（上流側）において、溝底部近くから古墳時代の土師器甕と須恵器杯身が出土した。同じ6調査区のより西側（下流側）から中世の遺物が少量出土したので、溝が完全に埋没したのは中世と考えられるが、溝の初源は古墳時代にさかのぼる可能性がある。また、上部は中世の水田開発に伴う削平を受けたものと考えられる。

62溝（図5） 調査区南部に位置する。ほぼ真北に向けて流れる。検出長約3.1m、検出幅約0.9mである。断面は深さ約0.06mの浅いW字形を呈する。埋土は灰色細砂である。土師器皿（図11-19）が出土した。

2溝（図5、図版3-4） 調査区南部に位置する。ほぼ真西に向けて流れ、調査区外に伸びる。検出長約16.0m、検出幅約1.1mである。断面は深さ約0.25mの浅いU字形を呈する。埋土は浅黄色細砂～粗砂がラミナ状に混入する暗オリーブ灰色中砂である。土師器皿、瓦器椀（図11-20・21）、瓦質土器火鉢（図11-22）、須恵器甕が出土した。瓦質土器火鉢が14世紀後半～15世紀前半の室町時代に属する。

36溝（図5） 調査区南部に位置し、一部を2溝に切れ、西側は調査区外に伸びる。真西より約11度北に振れた方向にはほぼ直線的に流れる。検出長約12.5m、検出幅0.3～0.5mである。断面は深さ約0.1mの浅いU字形を呈する。埋土はオリーブ黒色粘土である。溝内から土師器皿（図11-23）、須恵器鉢（図11-24）が出土した。溝の南肩部で、土師器皿を伏せた状態で検出した（図10-17・図版3-5）。

33溝（図5） 調査区南部に位置し、東・西側を溝群に切られる。真西より約25度南に振れた方向に流れ、真西方向に曲がる。検出長約4.0m、検出幅約0.3mである。断面は深さ約0.1mの浅いU字形を呈する。埋土は、褐灰色粗砂混じり粘土である。土師器皿が出土した。

なお、当溝は有池遺跡03-1の6調査区65溝に連続するとみている。上部が中世の水田開発に伴う削平を受けて、部分的に途切れるが、ほぼ直線的に伸び、総延長は40mに及ぶ。

26溝（図5・6） 調査区南端に位置する。西北西にはほぼ直線的に流れる3本の溝が重なったものとみられる。中央の溝の両肩部を北側の溝と南側の溝が切っていることから、中央の溝が先行することがわかる。北側の溝は西側が調査区外に伸び、検出長約16.1m、検出幅0.2～0.6mである。断面は深さ約0.27mの逆台形を呈する。埋土上層は、浅黄色中砂がラミナ状に入る灰色細砂であり、下層はオリーブ灰色粘土ブロックが入る灰色粘土である。中央の溝は検出長約5.8m、検出幅約0.28mである。断面は深さ約0.06mの逆台形を呈する。埋土は浅黄色細砂～粗砂がラミナ状に入る灰色細砂である。南側の溝は東側が別溝に切れ、西側は調査区外に伸びる。検出長約14.8m、検出幅約0.5mである。断面は深さ約0.25mのV字形を呈する。埋土は北側の溝に相似する。土師器皿、瓦器椀が出土した。

2 調査区

86土器溜り（図5・7、図版4-1） 調査区北端中央に位置する。浅い落ち込みの中に、東西0.9m、南北0.2mの範囲で土器が集中する。調査区外の北側にさらに続く可能性がある。出土土器は、白磁椀の破片が少量出土したほかはすべて土師器皿であり、大半が口縁を上に向けた状態で出土した。実測可能な個体だけで13個体を数え、これらは大小2種に分類できる（図13-42～54）。小型品は11個体あり、

その法量は口径9.0～9.4cm、器高1.2～1.9cmである。大型品は2個体あり、その法量は口径13.8cm、器高3.5cmと口径15cm、器高2.8cmである。これらの時期はいずれも12世紀前半であり、平安時代後期の遺構と考えられる。

土師器皿の出土状況から、単なる廃棄遺構とは考えにくい。当遺構は居住域（2調査区）と耕作域（1調査区南部）の境目に位置することから、地鎮などの祭祀に伴う遺構の可能性がある。

113柱列（図5・8） 調査区南部中央に位置する。調査区内で東西3間分、南北1間分の柱列を検出した。調査区外に続くと考えられる。西から65ピット、68ピット、71ピット、109ピットが一列に並び、68ピットの南南西に69ピットが、71ピットの南南西に100ピットが位置する。柱列の方向は真西より約

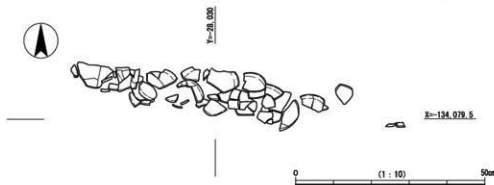


図7 2調査区86土器溜り平面実測図（1：10）

12度北に傾く。各ピットとも柱根の遺存はなかった。68ピットを除いて、埋土には柱痕跡が認められないことから、廃絶時に大部分の柱が抜き取られたものと考えられる。

柱の間隔は不揃いである。想定される柱の心々間距離は以下のようになる。65ピット～68ピット間が約2.7m、68ピット～71ピット間が約2.1m、71ピット～109ピット間が約1.8m、68ピット～69ピット間が約2.0m、71ピット～100ピット間が約2.0m、69ピット～100ピット間が約2.2mである。

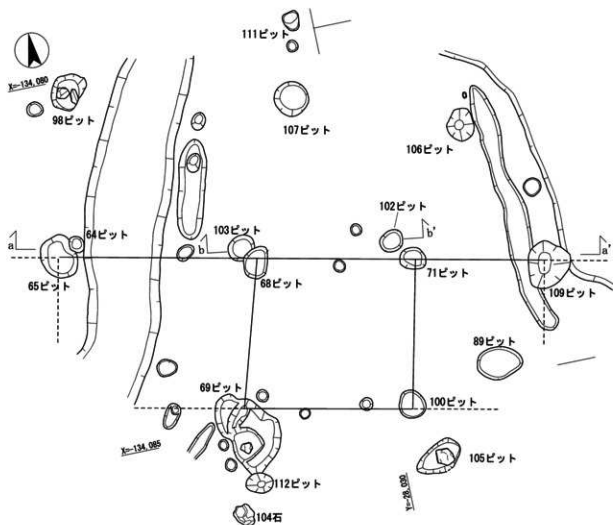
65ピットより土師器皿、瓦器碗が出土した。これらは柱抜き取り後に堆積した土に入ったものとみられる。65ピットの北東に接して64ピットがある。土師器皿、瓦器碗が出土したほか、焼土塊を検出した。68ピットから土師器皿、土師質土器羽釜（図12-35）、瓦器碗、瓦器皿（図12-36）、焼土塊が出土した。土師質土器羽釜、瓦器皿の年代は12世紀後半とみられ、113柱列の年代を示唆する。71ピットでは土師器皿が出土した。109ピットでは土師器皿、須恵器が出土した。これらは柱抜き取り後に堆積した土に入ったものとみられる。

113柱列は、68ピットの遺物の年代から、平安時代後期の柱列とみられる。

なお、68ピットの北西には103ピットが、71ピットの北西には102ピットが隣り合っており、ほぼ同一位置において柱の建て替えがあった可能性がある。103ピットからは土師器皿、瓦器碗、須恵器甕が出土した。

112ピット（図8） 形状は、径0.25～0.35mの楕円形である。断面は深さ0.07mの皿形を呈する。埋土は暗灰黄色細砂混シルトである。土師器皿（図12-39・40）が出土した。

106ピット（図8） 調査区中央部北東寄りに位置する。形状は、径0.35～0.4mの不整形円形である。断面は深さ約0.2mのV字形を呈する。埋土は中央部と周辺部で分かれる。中央部は、灰色粘土が斑状に入る灰オリーブ色細砂であり、炭化物が混じる。土師器皿、瓦器碗が出土した。これらは柱抜き取り後に堆積した土に混入したものとみられる。瓦器碗の年代は11世紀から12世紀とみられる。周辺部は、灰



- | | | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1 暗灰黄色2.5Y4/2細砂。
灰オリーブ色5Y5/3細砂が瓊状に入る。
遺物混じる</p> <p>2 暗灰黄色2.5Y4/2中砂混粘土</p> <p>3 灰オリーブ色5Y5/3細砂混粘土。
オリーブ黒色5Y3/2粗砂混粘土が瓊状に入る</p> | <p>1 灰オリーブ色5Y5/3細砂。
オリーブ黒色5Y3/2細砂が
瓊状に入る</p> <p>2 オリーブ黒色5Y3/2細砂。
遺物、炭化物混じる</p> | <p>1 暗灰黄色2.5Y4/2細砂。
灰オリーブ色5Y5/3細砂
が瓊状に入る</p> <p>2 オリーブ灰色5G5/1シルト</p> <p>3 オリーブ色5Y5/4中砂</p> <p>4 オリーブ灰色10Y4/2中砂～粗砂</p> | <p>1 灰オリーブ色5Y5/3細砂。
灰色5Y4/1粘土が瓊状に入る。
遺物、炭化物混じる</p> <p>2 灰オリーブ色7.5Y4/2シルト</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|



- | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1 オリーブ黒色5Y3/2細砂。
遺物、炭化物混じる</p> <p>2 オリーブ黒色5Y3/2粘土。
遺物混じる</p> <p>3 灰色5Y4/1粘土</p> | <p>1 暗灰黄色2.5Y4/2細砂。
灰オリーブ色5Y5/3が瓊状に入る</p> <p>2 暗オリーブ灰色2.5B4/1細砂。
灰オリーブ色5Y5/3細砂が瓊状に入る</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|



図8 2調査区113柱列実測図 (1:50)

オリブ色シルトと暗オリブ灰色粘土である。

111ピット (図8) 調査区中央部北寄りに位置する。形状は、径0.2～0.3mの不整形円形である。断面は深さ0.2mのV字形を呈する。埋土は3層に分かれ、上層は炭化物が混入するオリブ黒色細砂混シルト、中層は灰オリブ色細砂混シルト、下層は灰色細砂混シルトである。土師器皿(図12-31)が出土した。

98ピット (図8、図版4-2・4-3・4-4)

調査区中央部北西寄りに位置する。径約0.5mの不整形円形である。断面は深さ0.3mのU字形を呈する。埋土は、暗灰黄色中砂混粘土が斑状に混じる灰オリブ色中砂混粘土である。内部から瓦器碗や土師質羽釜の破片が出土した。瓦器碗の年代から、平安時代後期の遺構と捉えることができる。

89ピット (図8) 調査区南端西寄りに位置する。形状は、径0.45～0.5mの楕円形である。断面は深さ約0.09mの皿形を呈する。埋土は地山類似土である。瓦器碗(図12-37)が出土した。

105ピット (図8・9、図版4-7・4-8) 調査区南端西寄りに位置する。径0.35～0.65mの楕円形である。断面は深さ約0.1mの皿形を呈する。埋土は、灰オリブ色中砂混粘土が斑状に入る暗灰黄色中砂混粘土であり、0.5cm大の礫、炭化物が混じる。平安時代後期の土師器皿(図12-38)、瓦器碗が出土した。また、この底面から水平に置かれた扁平な自然石を検出した。この石は径約23cmの不整形の平面形で、厚さ約6cmを測る。掘立柱の礎板として使用された石とみられる。この石の下からさらにピット状のものを検出した。

註) 中光司 昭和61年(1986)「交野の山・川・池」『交野市史 自然編1』交野市

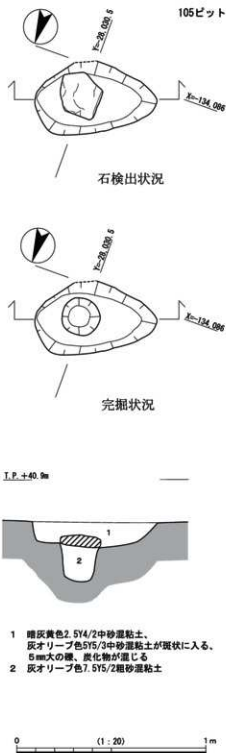


図9 2調査区105ピット実測図(1:20)

第3節 遺物

1 調査区から出土した遺物は土師器皿、土師質土器羽釜・鍋、瓦器皿・椀、瓦質土器鉢、須恵質陶器鉢、青磁椀、白磁椀、陶器皿・鉢・甕、キセル火口、砥石、輪羽口がある。2 調査区では、土師器皿、土師質土器羽釜、瓦器皿・椀、キセル吸口が出土した。

調査区2層上層の時期は、陶器皿（唐津）の製作年代を指標にすれば、室町時代後期（戦国期）を遡らない。2層下層は室町時代中期、3層が鎌倉時代に比定される。

図10は、1調査区2層上層（1～7）、2層下層（8～14）、3層（15・16）、2面直上（17）から出土した遺物を図示し、図11は1調査区の各遺構から出土した遺物を、図12と図13は2調査区の各遺構の出土遺物を、図14は1調査区の金属製品、石製品、土製品、2調査区の金属製品を図示している。

図10（図版6・8）

1は土師器皿で、口径7.4cm、器高13cmを測る。底部から口縁部までほぼ残存する。底部は平坦で、体部は内湾気味にゆるやかに立ち上がり口縁端部は丸く収める。外面はにぶい黄橙色、焼成は良好である。2は同じく土師器皿で、口径7.7cm、器高1.1cm、器壁は0.4cmを測る。底部から口縁部までほぼ残存する。底部は平坦で、体部は斜め上方に直線的に伸び、口縁は肥厚して端部を上方に積み上げる。外面は灰白色を呈する。3は瓦器椀で体部下半を欠く。体部は内湾気味に斜め上方に伸び、口縁部は直立気味に立ち上がり端部を軽く積みあげる。器壁は薄く、外面は灰白色を呈する。4は瓦器椀で、底部のみが遺存する。平坦な底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。高台径は5.4cmを測る。外面は灰白色で、焼成は良好である。5は青磁椀で体部上半を欠く。高台径5.8cmを測る。平坦な底部に削り出しの分厚い高台が取り付き、高台端部は開き気味に短く下方に伸びる。軸は灰オリーブ色を呈し、断面は灰白色を呈する。6は白磁椀で、体部下半と高台を欠く。口径は15.5cmを測る。体部上半は内湾気味に斜め上方に立

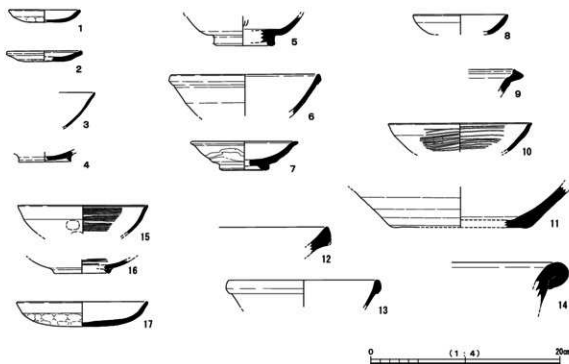


図10 出土遺物実測図1（1：4）

ち上がり、口縁部は外方に肥厚して玉縁を作り、端部は丸く収める。釉は灰白色を呈し、断面も灰白色を呈する。7は陶器皿で唐津産とみられる。口径11cm、器高3cmを測る。平坦な底部に外方に踏ん張る低い高台が付き、体部は内湾気味に立ち上げ、口縁部は外反する。内面と外面口縁部に灰オリーブ色の釉が掛かる。8は土師器皿で、底部を欠く。口径は9.8cm、器高2.1cmを測る。体部から口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。9は土師質土器鍋で、内外に煤が付着する。口縁部は斜め外方に伸び、端部は肥厚して斜め外方で面を成す。10は瓦器碗で、底部を欠く。口径は14.9cmを測る。体部上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反し、内面端部に沈線が巡る。内外に疎らなミガキを施す。11は須恵器鉢で、体部上半を欠く。平坦な底部から体部下半が斜め上方に伸びる。12は須恵器鉢で、口縁部のみが遺存する。口縁部は斜め上方に伸び、端部は肥厚して面をなす。13は白磁碗で底部と体部下半を欠き、口径は15.8cmを測る。体部上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外方に肥厚して玉縁を作る。14は陶器甕で、口縁端部のみが遺存する。口縁端部は外反して丸め込まれ、擬玉縁状を呈する。15は瓦器碗で、体部下半以下を欠く。口径は13.5cmを測る。体部上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反し、端部内面に沈線を巡らす。内面にミガキを施す。16は瓦器碗で、底部から体部下半が遺存する。体部下半は内湾気味に緩く立ち上がり、断面三角形の低い高台を貼り付ける。17は土師器皿で、口径13.7cm、器高2.7cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反し、端部は丸く収める。

図11 (図版6・8)

18は瓦器碗で、底部のみが遺存する。底部径5.4cmを測る。底部に、断面三角形の低い高台を貼り付ける。19は土師器皿で、口径7.8cm、器高1.2cmを測る。体部は内湾気味に短く立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸く収める。20は瓦器碗で、底部を欠く。口径13.3cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は斜め上方に直線的に伸び、端部内面に沈線を巡らす。21は瓦器碗で、底部のみが遺存する。底部径5.2cmを測る。底部は平坦で、断面三角形の低い高台を貼り付ける。22は瓦質土器鉢で、火鉢とみられ、口

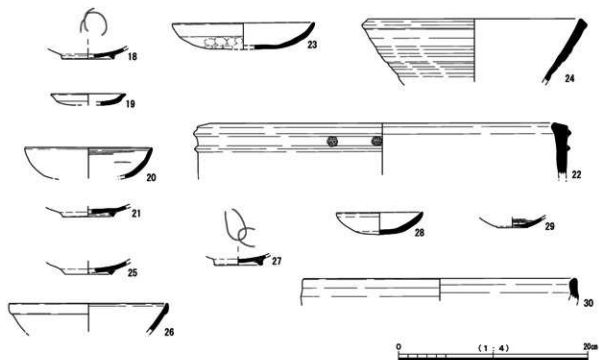


図11 出土遺物実測図2 (1:4)

縁部のみが遺存する。口縁部は直線的に上方に伸び、端部は肥厚して上方で面を作り、面は緩く外方を向く。外面に断面三角形の凸帯を2条巡らし、凸帯間に印刻花文を配する。23は土師器皿で、口径14.8cm、器高2.8cmを測る。底部は平坦で、体部は内湾して立ち上がり、口縁は斜め上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。24は須恵器鉢で、底部を欠く。口径23.8cmを測る。体部から口縁部は、肥厚しながら斜め上方に伸び、口縁端部は斜めの平坦面を外方に作る。25は瓦器碗で、体部上半以上を欠く。底部から体部は内湾気味に伸び、断面三角形の低い高台を貼り付ける。26は白磁碗で、体部下半を欠く。口径16.6cmを測る。体部上半は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚して玉縁を作る。27は瓦器碗で、底部のみが遺存する。底部径4.9cmを測る。底部は内湾気味に外方へ伸び、断面三角形の低い高台を貼り付ける。28は土師器皿で、口径9cm、器高2.4cmを測る。底部は平坦で、体部から口縁部は内湾して伸び、端部を上方に摘み上げ丸く収める。29は瓦器碗で、体部下半以下が遺存する。底部の器壁は薄く、内側に窪む。体部は内湾気味に伸び、底部との境目に低く小さな高台を貼り付ける。30は陶器鉢で、口縁部のみが遺存する。口縁部は内傾気味に伸び、端部はわずかに面をもつ。

図12 (図版7・9)

31は土師器皿で、底部を欠く。口径8.1cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反して伸びる。32は土師質土器羽釜で、底部と体部上半以上を欠く。体部下半は内湾して立ち上がり、上方に伸びる体部上半と繋がるものとみられる。器壁は厚く、外面は赤褐色を呈する。33は瓦器碗で、口径14.9cm、器高5.2cmを測る。底部中央から内湾気味に体部に至り、体部は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。内面端部に沈線を巡らし、断面三角形の高台を貼り付ける。内面にミガキを施す。34は瓦器碗で、底部を欠いている。口径14.6cm、器高4.7cmを測る。体部は内湾して斜め上方に立ち上がり、口縁部は外反する。内面端部に明瞭な沈線を巡らす。内面にミガキを施す。底部は内面上方に盛り上がる。35は土師質土器羽釜で、口縁部と鋳部が遺存する。口縁部は内傾気味に伸び、口縁端部は狭い平坦面を作る。断面三角形の鋳を外面に貼り付ける。36は瓦器皿で、口径9.2cm、器高1.7cmを測る。底部は平坦で、体部は内湾して斜め上方に伸び、口縁部は緩く外反する。37は瓦器碗で体部上半以上を欠く。平

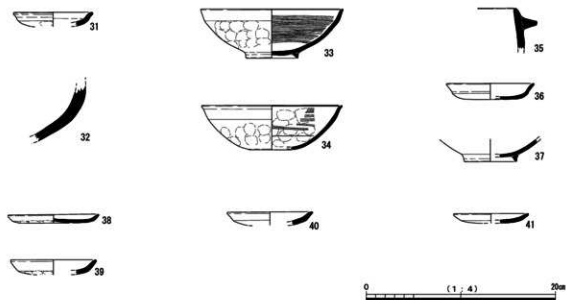


図12 出土遺物実測図3 (1:4)

坦な底部から内湾しつつ体部下半が伸び、底部との境に断面三角形のやや高い高台を貼り付ける。38は土師器皿で、口径9.4cm、器高0.9cmを測る。底部中央が内面上方にやや盛り上がり、底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く斜め上方に伸び、端部は丸く収める。39は土師器皿で、口径8.9cm、器高1.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は斜め上方に短く伸びて端部は丸く収める。40は土師器皿で、口径8.9cm、器高1.4cmを測る。体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部は短く外反して端部を丸く収める。41は土師器皿で、口径7.8cm、器高1cmを測る。底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反して伸び、端部は丸く収める。

図13 (図版7・9)

42は土師器皿で、口径9.3cm、器高1.8cmを測る。底部中央は緩く内面上部に盛り上がる。底部から体部は内湾して立ち上がり、口縁部は斜め外方に伸び、端部を丸く収める。43は土師器皿で、口径9.4cm、器高1.8cmを測る。底部は平坦で、体部は内湾しながら立ち上がり、端部は斜め外方に伸び、端部は丸く収める。44は土師器皿で、口径9cm、器高1.8cmを測る。底部は平坦で、体部は内湾しつつ斜め外方に伸びる、口縁部は緩く外反して端部は丸く収める。45は土師器皿で、口径9.1cm、器高1.8cmを測る。体部は内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁部は斜め外方に伸びる。口縁端部は丸く収める。46は土師器皿で、口径9cm、器高1.9cmを測る。底部中央から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反して伸び、端部は丸く収める。47は土師器皿で、口径9cm、器高1.5cmを測る。底部はほぼ平坦で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反して伸び、端部は丸く収める。48は土師器皿で、口径9.1cm、器高1.6cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反して伸び、端部は丸く収める。49は土師器皿で、口径9cm、器高1.5cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。端部は丸く収める。50は土師器皿で、口径9.2cm、器高1.5cmを測る。体部は内湾気味に緩く立ち上がり、口縁部は外反して丸く収める。51は土師器皿で、口径9.4cm、器高1.5cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反して伸び、端部は丸く収める。52は土師器皿で、口径9.4cm、器高1.2cmを測る。底部から体部は緩く内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。端部は丸く収める。53は土師器皿で、口径13.8cm、

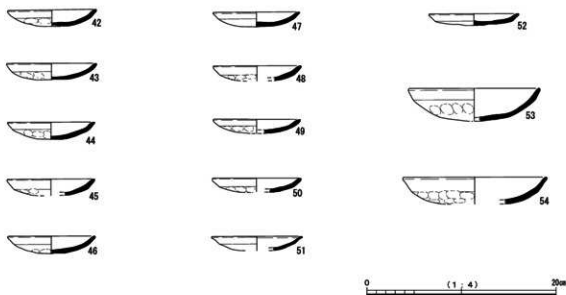


図13 出土遺物実測図4 (1:4)

器高3.5cmを測る。底部から体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁部は斜め外方に伸び、端部は丸く収める。
 54は土師器皿で、口径は15cm、器高2.8cmを測る。端部は内湾しつつ立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸く収める。

図14 (図版9)

55はキセル火口で、全長7.5cm、火口径1.5cm、筒部最大径0.9cm、筒部最小径0.6cmを測る。材質は黄銅とみられる。56は砥石で、長径7.7cm、短径3.7cm、厚さ1.5cmを測る。二方に平滑な面をもち、磨面部分とみられる。材質はサスカイトである。57は輪羽口の残片とみられるもので、縦4.9cm、横4.4cm、幅4.0cmを測る。火熱により、部分的にオリーブ灰色とにぶい橙色に変色する。58は砥石で、長辺5.3cm、短辺3.8cm、厚さ1.7cmを測る。一方に磨面があり平滑となる。材質は緑泥片岩とみられる。59はキセル吸口で、残存長7.6cm、筒部最大径1.1cm、筒部最小径0.4cmを測る。材質は黄銅とみられる。

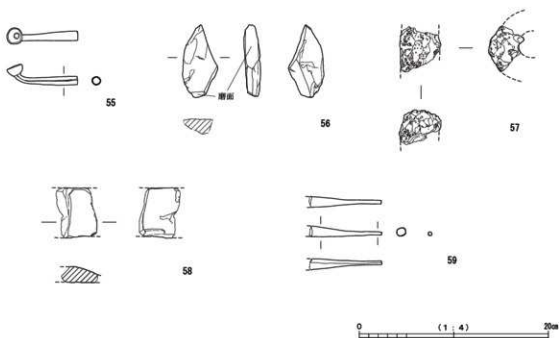


図14 出土遺物実測図5 (1 : 4)

第4章 まとめ

今回の調査地は有池遺跡の中でも北部に位置する。周辺ではこれまでに第二京阪道路（大坂北道路）建設に伴う発掘調査が有池遺跡02-1・有池遺跡03-1・有池遺跡03-2として実施されている。これらの調査から、平安時代後期から室町時代前期においては微高地の最上部を居住域、その南北の低い谷地を耕作域や水路として利用し、免除川に近接する低湿地帯には開発が及んでいなかったことが明らかになっている。今回の調査でも、居住域、耕作域、開発の及ばなかった低湿地を検出している。

1 調査区では、初源が古墳時代までさかのぼる可能性がある7溝を検出した。有池遺跡の南端に位置する有池遺跡03-2の調査地では、古墳時代から中世にかけて徐々に埋没していく溝を複数検出しており、これらの溝との関連が考えられる。この溝の南側は、耕作に伴う溝が複数回わたって掘削されているが、北側は中世段階においては未開発で、免除川の旧流路に続く低湿地の状況が明らかになった。このことから、7溝は用水路の機能とともに、耕作地として利用可能な土地と、利用不可能な低湿地とを区画する機能をもあわせもった溝であった可能性が高い。

耕作域と考えられる1調査区南半では、溝が重複して検出された。溝の方向が年代を反映しており、東西南北方向でない溝群が平安時代後期から鎌倉時代前期に埋没し、東西南北方向を指向する溝群が室町時代に埋没したと考えられる。南東から北東方向に徐々に低くなる地形に沿った土地区画から、条里地割に即した土地区画へと変遷していくさまがうかがえる。

2 調査区では、検出した柱穴群から113柱列を復元できた。平安時代後期の遺構と考えられる。柱列の方向は、1調査区南半で検出された平安時代後期の溝の方向に近い。

以上の成果から、当調査地の土地利用の変遷を以下のように考えることができる。平安時代後期に自然地形にあわせた土地区画がなされ、2調査区は居住域として、1調査区南部は耕作域として利用され、1調査区北部は自然流路、低湿地帯となっていた。その後、1調査区南部は室町時代までに東西南北方向の条里地割に合わせた土地区画がなされる。これが室町時代中期から安土桃山時代にかけて、自然流路、低湿地帯も含めた全域が耕作域となり、現代に至ったものとみられよう。

表1 出土遺物一覧表

番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	調整	焼成	胎土(cm)	色澤			調査区	地区	遺構	図	図原
								外面	内面	断面					
1	土師器	皿	7.4	1.3	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石・石英・雲母	灰白色 10YR7/2	灰白色 10YR7/2	灰白色 7.5YR7/3	1	1F-2h/3h	2層上	10	8
2	土師器	皿	7.7	1.1	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の灰石・石英	灰白色 10YR8/2	淡褐色 5YR8/3	にぶい褐色 2.5YR/2	1	1F-4f	2層上	10	8
3	瓦器	碗	(3.7以上)		横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 2.5YR/1	淡黄色 2.5Y/4	灰白色 2.5YR/3	1	1F-5h	2層上	10	8
4	瓦器	碗	底径5.4	1.1以上	ナデ・ミガキ・貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 7.5YR/1	灰白色 N4/	灰白色 7.5YR/1	1	1F-5h	2層上	10	8
5	青磁	碗	底径5.8	3.1以上	ロクロ・削り出し高台	良好	緻密	輪部灰オリブ 色7.5YR/2	輪部灰オリブ 色7.5YR/2	灰白色 10YR/1	1	1F-5h	2層上	10	8
6	白磁	碗	15.5	4.4以上	ロクロ・クズリ	良好	緻密	輪部灰白色 2.5G/1	輪部灰白色 2.5G/1	灰白色 N8/	1	1F-5g	2層上	10	8
7	陶器	皿	11	3	ロクロ・削り出し高台	良好	0.5以下の長石・石英	輪部灰オリブ 色7.5YR/3	輪部灰オリブ 色7.5YR/3	にぶい褐色 7.5YR/3	1	1F-4g	2層上	10	6
8	土師器	皿	9.8	2.1	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石・石英・雲母	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	1	1F-6c/7c	2層上	10	8
9	土師質土器	鍋	2.6以上		横ナデ	良好	0.5以下の長石	にぶい褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR/2	にぶい褐色 7.5YR/3	1	1F-6d	2層下	10	8
10	瓦器	碗	14.9	3.1以上	横ナデ・ミガキ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N4/	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	1	1F-6c/7c	2層下	10	8
11	須恵器	鉢	底径13.1	4.3以上	ロクロ・糸切り底	良好	密	青灰色 5B5/1	青灰色 5B5/1	青灰色 5B5/1	1	1F-6d	2層下	10	6
12	須恵器	鉢	2.9以上		ロクロ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N7/	灰白色 N7/	灰白色 N7/	1	1F-6c	2層下	10	8
13	白磁	碗	15.8	2.8以上	ロクロ	良好	緻密	輪部灰白色 2.5G/1	輪部灰白色 7.5YR/1	灰白色 7.5YR/1	1	1F-5d	2層下	10	8
14	陶器	甕	4.9以上		ロクロ	良好	0.5以下の長石・石英	暗オリブ色 5Y4/4	灰褐色 5Y4/2	灰白色 10YR7/1	1	1F-6d	2層下	10	6
15	瓦器	碗	13.5	3.0以上	横ナデ・ミガキ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N4/	灰白色 2.5YR/2	灰白色 2.5YR/2	1	1F-5c/6c/7c	3層	10	8
16	瓦器	碗	底径5.7	1.4以上	ミガキ・貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N4/	暗灰色 N3/	淡黄色 2.5YR/3	1	1F-5c/6c/7c	3層	10	8
17	土師器	皿	13.7	2.7	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 7.5YR8/2	淡黄褐色 7.5YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/3	1	1F-4g	2層上	10	6
18	瓦器	碗	底径5.4	1.2以上	ミガキ・貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 7.5YR/1	灰白色 N5/	灰白色 7.5YR/1	1	1F-3g	9ピット	11	8
19	土師器	皿	7.8	1.2	横ナデ	良好	0.5以下の長石・石英	淡黄褐色 7.5YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/3	1	1F-4f	62溝	11	8
20	瓦器	碗	13.3	3.3以上	ナデ・ミガキ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N6/	灰白色 N4/	灰白色 N8/	1	1F-4g	2溝	11	8
21	瓦器	碗	底径5.2	1.1以上	貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	暗灰色 N3/	暗灰色 N3/	灰白色 N8/	1	1F-4g	2溝	11	8
22	瓦質土器	鉢	36.4	5.4以上	ロクロ・ナデ	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N5/	灰白色 7.5YR/1	灰白色 7.5YR/1	1	1F-4g	2溝	11	6
23	土師器	皿	14.8	2.8	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石・石英	淡黄褐色 7.5YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/2	淡赤褐色 2.5YR/4	1	1F-4g	36溝	11	6
24	須恵器	鉢	23.8	6.7以上	ロクロ・ナデ	良好	0.5以下の長石・石英黒色粒	灰白色 N4/	青灰色 5P6/1	青灰色 N6/	1	1F-4g	36溝	11	6
25	瓦器	碗	底径4.8	1.4以上	貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N4/	灰白色 N4/	淡黄褐色 10YR8/3	1	1F-3h/4h	20溝	11	8
26	白磁	碗	16.6	3.0以上	ロクロ	良好	緻密	灰白色 7.5Y7/2	灰白色 7.5Y7/2	灰白色 7.5YR/1	1	1F-3h/4h	20溝	11	8
27	瓦器	碗	底径4.9	1.1以上	貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N5/	灰白色 7.5YR/1	灰白色 7.5YR/1	1	1F-4h	21溝	11	8
28	土師器	皿	9	2.4	ナデ	良好	0.5以下の長石・石英	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰黄色 2.5Y7/2	1	1F-5d	6溝	11	6
29	瓦器	碗	底径3	1.1以上	ミガキ・貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	暗灰色 N3/	灰白色 7.5YR/1	灰白色 7.5YR/1	1	1F-5d	6溝	11	8
30	陶器	鉢	28.4	2.4以上	ロクロ・ナデ	良好	0.5以下の長石・石英	褐色 5YR5/1	灰白色 10R2/2	明茶灰色 5B7/1	1	1F-5d	6溝	11	8
31	土師器	皿	8.1	1.5	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石・石英赤色粒	淡黄褐色 7.5YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/3	淡黄褐色 7.5YR8/3	2	1F-4h	111ピット	12	9
32	土師質土器	羽釜	5.8以上		ナデ	良好	0.5以下の長石・石英雲母	灰黄色 10YR4/2	にぶい黄褐色 10YR7/3	黒褐色 10YR3/1	2	1F-4f	98ピット	12	9
33	瓦器	碗	14.9	5.2	ミガキ・ナデ貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	暗灰色 N3/	灰白色 N4/	灰白色 2.5YR/1	2	1F-4f	98ピット	12	7
34	瓦器	碗	14.6	4.7	ミガキ・ナデ貼付け高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N4/	灰白色 N4/	灰白色 2.5YR/1	2	1F-4f	98ピット	12	9
35	土師質土器	羽釜	4.2以上		ナデ	良好	0.5以下の長石・石英	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 5YR7/3	2	1F-4f	98ピット	12	9
36	瓦器	皿	9.2	1.7	横ナデ	良好	0.5以下の長石・石英黒色粒	灰白色 N5/	灰白色 2.5YR/2	灰白色 2.5YR/2	2	1F-4f	98ピット	12	9
37	瓦器	碗	底径5.4	2.4以上	ミガキ 貼付高台	良好	0.5以下の長石・石英	灰白色 N4/	灰白色 2.5YR/1	灰白色 2.5YR/1	2	1F-3f	98ピット	12	9
38	土師器	皿	9.4	0.9	横ナデ・オサエ	良好	0.5以上の長石・石英	淡黄褐色 7.5YR8/3-4	淡黄褐色 7.5YR8/3-4	にぶい黄褐色 10YR7/2	2	1F-3f	105ピット	12	7
39	土師器	皿	8.9	1.6	横ナデ	良好	0.5以下の長石・石英雲母	にぶい黄褐色 10YR7/3	淡黄褐色 7.5YR8/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	2	1F-4f	112ピット	12	9
40	土師器	皿	8.9	1.4以上	横ナデ	良好	0.5以下長石・石英赤色粒	淡黄褐色 10YR8/3	淡黄褐色 10YR8/3	灰白色 10YR8/2	2	1F-4f	112ピット	12	9
41	土師器	皿	7.8	1	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下石炭雲母赤色粒	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR7/3	淡黄褐色 10YR8/3	2	1F-4f	98ピット	12	9

番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	調整	焼成	胎土(mm)	色調			調査区	地区	遺構	図	図説
								外面	内面	断面					
42	土師器	皿	9.3	1.8	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下の長石	灰白色 7.5YR8/2	浅黄褐色 7.5YR8/3	灰白色 7.5YR8/2	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
43	土師器	皿	9.4	1.8	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下長石 石英白雲母	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
44	土師器	皿	9	1.8	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下長石 石英赤色粒	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	灰白色 2.5Y8/2	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
45	土師器	皿	9.1	1.8	横ナデ・オサエ	良好	0.5以下長石 石英赤色粒	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	淡黄色 2.5Y8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	9
46	土師器	皿	9	1.9	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	灰白色 10YR7/1	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
47	土師器	皿	9	1.5	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR7/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
48	土師器	皿	9.1	1.6	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	浅黄褐色 10YR8/3	灰白色 10YR8/2	浅黄褐色 10YR8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	9
49	土師器	皿	9	1.5	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	浅黄褐色 10YR8/3	淡黄色 2.5Y8/3	浅黄褐色 10YR8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	9
50	土師器	皿	9.2	1.5	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	灰白色 7.5Y8/2	浅黄褐色 10YR8/3	灰白色 10YR8/2	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	9
51	土師器	皿	9.4	1.5	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	9
52	土師器	皿	9.4	1.2	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
53	土師器	皿	13.8	3.5	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	淡褐色 5YR8/4	淡褐色 5YR8/4	淡褐色 5YR8/4	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
54	土師器	皿	15	2.8	横ナデ・オサエ	良好	0.5長石石英 白雲母赤色粒	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	浅黄褐色 7.5YR8/3	2	1F-3h/4h	86土師 溜り	13	7
55	キセル 火口		口径1.5 ~0.9	長7.5			材質 黄銅				1	1F-3h/4h	1層	14	9
56	砥石		長径7.7	短径3.7			石質 サマカ イト	灰色 N5/			1	1F-2h/3h	2層	14	9
57	輪羽口		縦4.9以上	横4.4				浅黄褐色 7.5YR8/3		灰黄褐色 10YR5/2	1	1F-4h	22溝	14	9
58	砥石		長径5.3	短径3.8			石質 緑泥片 岩	灰色 7.5Y6/1		灰色 7.5Y6/1	1	1F-5d	6溝	14	9
59	キセル 吸口		口径1.1 ~0.4	長7.6以上			材質 黄銅				2	1F-3i		14	9

写 真 图 版



垂直写真（上が北方向）

図版 2 遺跡



1. 全景 (南から)



2. 1調査区北半全景 (南東から)



1. 1調査区南半全景(東から)



2. 1調査区7溝(南西から)



3. 1調査区7溝断面(南西から)



4. 1調査区2溝(西から)

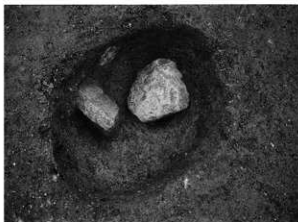


5. 1調査区36溝南肩部土器出土状況(南から)

図版4 遺跡



1. 2調査区86土器溜り検出状況(北から)



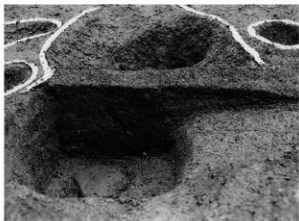
2. 2調査区98ピット上層石検出状況(北から)



3. 2調査区98ピット土器検出状況(北から)



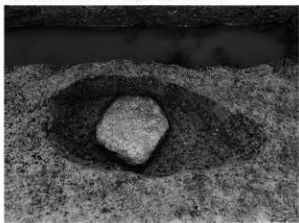
4. 2調査区98ピット下層石検出状況(北から)



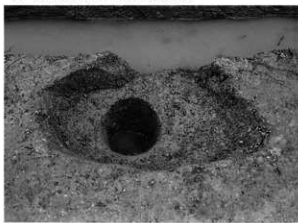
5. 2調査区69ピット石検出状況(南から)



6. 2調査区69ピット断面(南から)



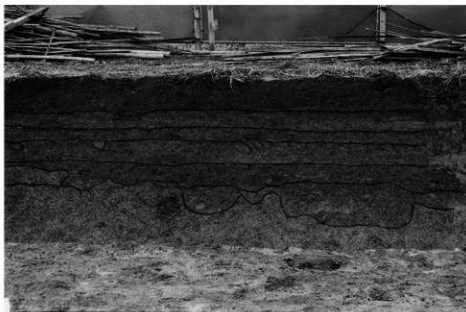
7. 2調査区105ピット石検出状況(北から)



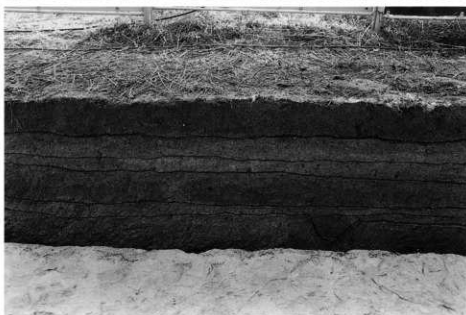
8. 2調査区105ピット完掘状況(北から)



1. 1 調査区北部西側断面
(基本層序柱状図②)

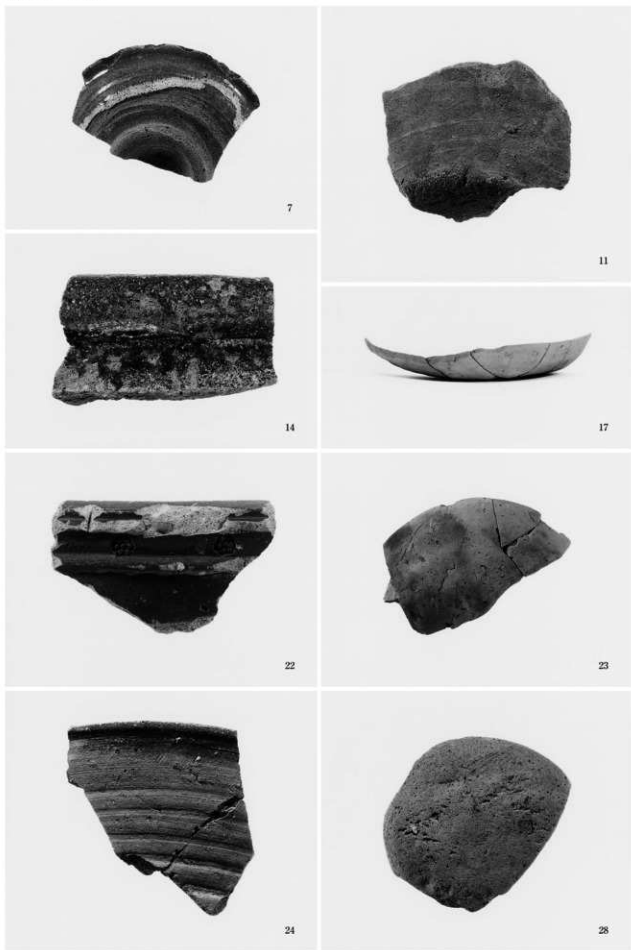


2. 1 調査区南部西側断面
(基本層序柱状図④)

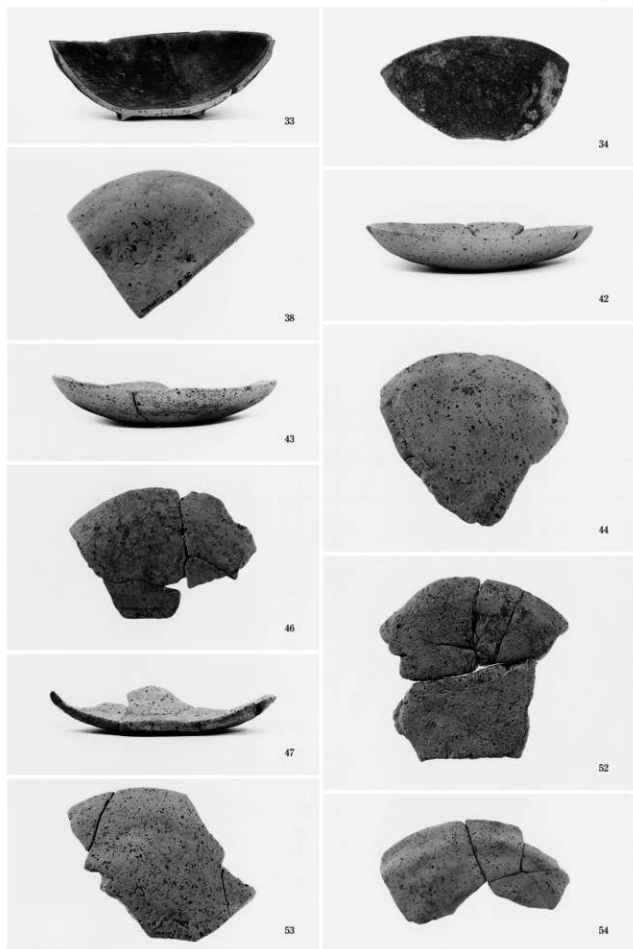


3. 2 調査区南西側断面
(基本層序柱状図⑤)

図版 6 遺物

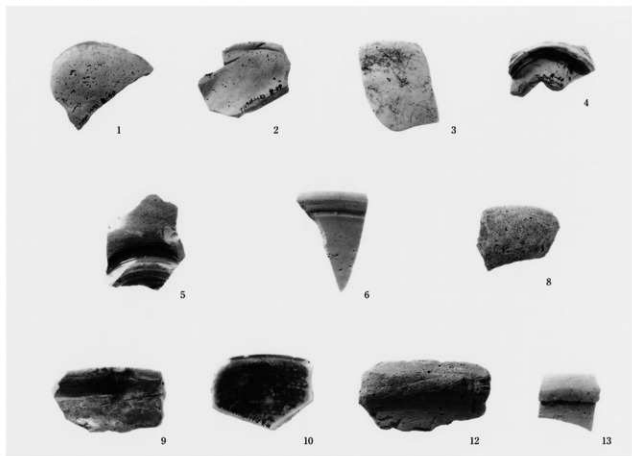


1調査区2層上層(7)・2層下層(11・14)・2面直上(17)・2溝(22)・36溝(23・24)・6溝(28)

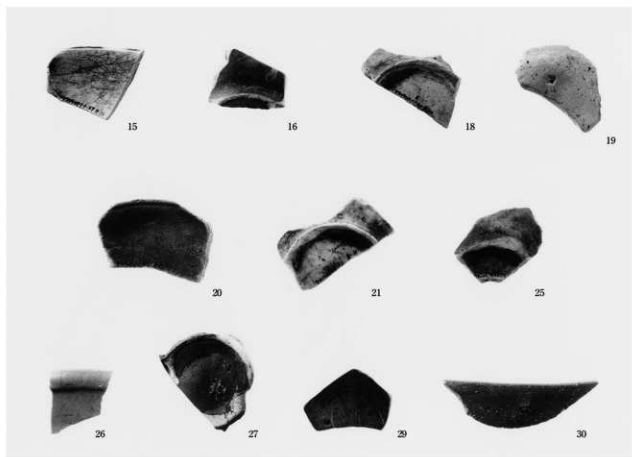


2調査区98ビット(33・34)・105ビット(38)・86土器溜り(42~44・46・47・52~54)

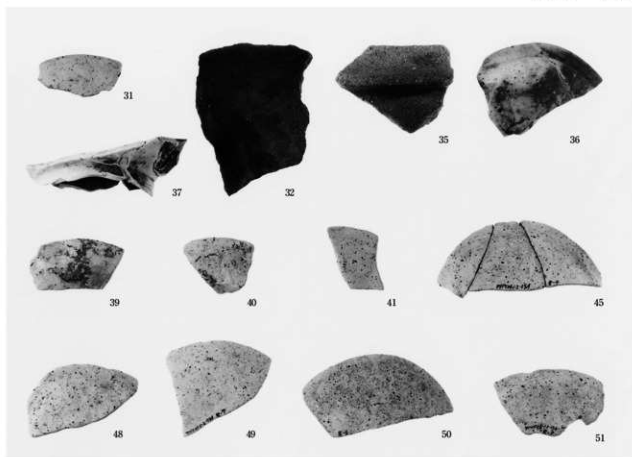
図版 8 遺物



1. 1調査区2層上層(1~6)・2層下層(8~10・12・13)



2. 1調査区3層(15・16)・9ピット(18)・62溝(19)・2溝(20・21)
20溝(25・26)・21溝(27)・6溝(29・30)



1. 2調査区111ピット (31)・98ピット (32)・68ピット (35・36)
89ピット (37)・112ピット (39・40)・69ピット (41)・86土器溜り (45・48~51)



2. 1調査区1層 (55)・2層 (56)・22溝 (57)・6溝 (58)・2調査区 (59)

報告書抄録

ふりがな	ありけいせいき							
書名	有池遺跡Ⅱ							
副書名	主要地方道枚方大和郡山線(都市計画道路村野神宮寺線)道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	平田 泰 遠藤啓輔							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2006年11月30日							
ありけいせいき 所収遺跡名	ありけいせいき 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
ありけいせいき 有池遺跡	かたのしまおほむら 交野市青山 ちようめあき 4丁目 地先	27230	22	34度47分17秒	135度41分47秒	2004年11月 19日～2005 年1月31日	880㎡	主要地方道路路整 備に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
有池遺跡	集落跡	平安時代 鎌倉時代 室町時代	土器溜り、柱列 溝、柱穴 溝	土師器、瓦器 土師器、瓦器、白磁、青磁 土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶器				
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・土器溜りならびに掘立柱からなる平安時代後期の柱列を検出した。 ・平安時代後期～鎌倉時代前期・室町時代の水田遺構を検出した。前者は微地形にそった土地区画を、後者は条里地割に即した東西南北方向の土地区画をもつ。 ・微高地と低地を区画し、用水路機能をもつ溝を検出した。 							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第148集

有池遺跡Ⅱ

主要地方道枚方大和郡山線 (都市計画道路村野神宮寺線)
道路整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

発行年月日/2006年11月30日

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本/株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号

